

礼拝

令和5年1月23日
8号



大島忌

～感謝の誠と捧げましょう～

本日は、今日の京都文
教学園の基礎を築かれた
第三代校長、大島徹水先
生の大恩に感謝する法要
を営み、全教職員・生徒
の皆さんで今後の学園発
展のために尽くすことを
誓い合う日であります。

現在の京都文教学園は
明治三十七年（一九〇四）巴
佛定上人を中心に坂根弥
兵衛らを設立代表として
開学された「私立高等家
政女子校」として始まり
ました。「仏教による道
徳教育」という教育方針
や、当時の先生方の熱心
な指導が高く評価され、
創立後、瞬く間に生徒数
が急増したそうです。そ
のため、校舎の増改築が
必要でしたが資金面で見
通しが立たず、大正二年
（一九一三）三月に閉校が決定
しました。しかし「本校
の教育が不十分で閉校に

なるのであれば諦めもつくが、学校の真
価が認められ、私たちを信頼して入学し
た生徒たちを別の理由で犠牲にすること
はできない。」との思いから、廃校反対
の有志者らが資金を集めました。校舎
改築には不足でした。その頃、主幹とな
った**大島徹水先生**も資金調達に当たり、
学校関係者（世話人・教職員・保護者・卒
業生）の協力とあわせて、廃校の危機を
回避するとともに、新しい土地への移転
を成し遂げました。

昭和五年（一九三〇）大島先生が第三代校長
に就任しました。校訓として清純貞淑・
感謝勤労・敬上慈下・天物尊重を掲げ、全
校集会では訓話を行い、また生徒の掃除
・風紀当番による校内美化や整理・生徒の
言動注意などを徹底して実施しました。
この頃にはさらに評判が評判を呼び生徒
数が増加したため、運動場の確保や校舎
増改築等の課題が山積しました。この解
決のため、現在の岡崎の地への移転が検
討されましたが、土地購入や校舎建設等
にかかる費用総額七十五万円をいかに集
めるか、**大島先生を除いては誰も見通せ
ない状況**でした。しかし昭和九年（一九三
四）九月、鉄筋コンクリート地上四階・地下
一階の本館（現在の一号館）が見事に完
成し竣工を迎えたのでした。
同じ頃、大島先生は東京の大本山増上
寺の法主に就任され、月の半分を本校、
半分を増上寺という二重生活を始められ
ました。その激務もあり昭和二十年（一九

五）一月二四日、本館の居室で七十五歳の
生涯を閉じられたのでした。

大島先生は一度目の移転のとき、すで
に再移転の必要性や資金繰りの困難を予
測し、**今度は独力でやらねばならないと
いう覚悟を持たれた**そうです。人知れず
十数年間で費用を蓄えるという奇跡的で
不思議な力は「一私立学校の校長が一念
独力で集めるには、七十五万円という額
は冷嘲を買うのに十分な数字であった
が、家政女学校の地鎮祭挙行は確かに行
われた」と新聞にも報じられました。「お
布施の五十銭から多いものでも五百円を
超えない」と、いかに少額の寄付が多く
集まったか思い知らされます。一方で、
教え子が亡くなったといえはその母は香
典を是非にと持参し、卒業生が結婚する
といえれば記念にと寄付があり、母となっ
た卒業生は「お金がないのでせめて労力
を差し上げたい」と、背に子どもを負い
大島校長を訪れた……。岡崎キャンパス
設立にはこうした涙ぐましいお話が数多
く織り込まれているのです。まさに大島
先生の人となり、そしてそれ故の偉業を
物語っているのです。

遷化されるまでの三十四年間、二度に
わたり本校の危機を救い、維持存続・隆
盛へと発展させた功績、そして、総合学
園としての今日の基礎を確立された功績
は、まさしく学園中興の祖であります。
その大恩に感謝の誠を捧げたいと思いま
す。